雪の深く積つてゐた間は、戸外の物音は暴風の唸きや浪の地響の外に何一つ聞えなかつたが、雪が消えるにつれて戸外の物音が日に〳〵耳につくやうになる。寒氣のはげしい間は、軒に滴る水の音さへきこえなかつた。

久しぶりで聞けば人の足音さへ珍らしく且なつかしく感じられる。荷車の音が街道にきこえ初めたのさへ、時にはたまらなくうれしい晴やかな氣持を誘ふ。

×

時々私の家に來て家事の手傳ひをしてくれる一人の婆さんがある。その婆さんは全く文字といふものを知らない。しかも、彼女みづからはその事によつて聊かの不自由をも感じてゐないらしい。

私は折々此の婆さんの全く文字と關係のない生活のいかなるものであるかについて考へて見る。婆さんの年齢はもう七十に近い。その永い生涯を唯一つの文字を知らずに過して來た婆さんの生活はどんなものであつたらう。

全く文字を知らない人の生活。それは今日の私達には神祕的にさへ見える。

×

私達の町にアワシマバンバと云ふ通稱を持つた不思議な老婆がある。どこに生れてどう云ふ閲歴を持つてゐるか、どこからどうして此の町に來たのかを知つてゐる人は、一人も無いやうだ。しかし、其の婆さんは、二十年餘も此の町の町端の乞食同樣な貧民の藁葺の小屋に同居してゐる。年はもう七十以上に見える。婆さんは毎日町中をうろついてゐる。時々は近在の村々にも姿を見せるといふことである。

婆さんは、しかし、乞食ではない。彼處此處で人から錢を貰つて、それで貧しい生活を營んでゐるのであるが、決してただの物乞ひではない。婆さんには手の筋を見て人の運命をうらなふと云ふ立派な職業がある。私達は時々町中の四つ辻のやうな場所で地べたに坐つて、往來の人の手の筋を見てゐる婆さんの神祕的な樣子を見る。實際どうかわからぬが、世間の噂では婆さんの占ひはよく當るといふことである。

私もしば〳〵此の婆さんが町中で人の手の筋を見てゐるのを見たことがある。一寸見ると婆さんの目は盲のやうに見えるが、手の筋を見たりするところを見ると實際はさうでないらしい。婆きんが人の運命を占ふ時には、相手がどんな人であらうと皆一樣に「おまへ」と呼ぶ。それから又婆さんのする身の上の判斷は人によつていくらかづつちがふとはいふものの、最後

の結論は誰に對しても同じである。

「何でも功德を積むことが大切ぢや。人になさけをかけてやらつしやれ。剛欲が何より大きな罪ぢやぞえ」

時々身の上の判斷がうまく當つたりすると、人によつては二十錢も三十錢もの禮金を婆さんの皺だらけの手につかませる事がある。すると婆さんは、

「こないな大金はわしやいりませぬ」

と云つて戻す。婆さんの占ひ料にはいくらでなければならぬと云ふ定めもないやうであるが、さうかと云つて二十錢三十錢と云ふやうな「大金」は決して請けない。せい〳〵五錢ぐらゐまでが婆さんにとつては最高の報酬とされてゐるらしい。さうかと云つて、何もやらなくても婆さんは何も言はない。

こんな風にしていても婆さんは日によつて一二圓も貰ひ溜めて歸ることがあるといふことである。しかも、そんな時には彼女は歸りがけにいろ〳〵な物を買つて、惜し氣もなく人にくれて歩くと云ふことである。

私達は此の婆さんの閲歴については何も知らない。どんな經路を辿つて現在のやう境遇に落

ちつくやうになつたのか少しもわからない。しかし、婆さんのあの謎のやうな姿を見ると、何となく惹きつけられる。そして彼女のあの晏如とした生活、あの恬淡とした心境！ その底にも何ものかが潜んでゐるやうにさへ思はれて、妙にいろ〳〵のことも考へさせられる。婆さんの手の筋の占ひがどれほど信ずべきものであるかは知らないが、しかし婆さんが何人に向つても「おまへは、その……」と云ふ調子で千遍一律的に與へてゐる教訓は解り切つたことでありながら、時として心を撲たれることさへもある。

冬の間私たちはアワシマバンバの姿を一度も町中に見なかつた。死んだといふ噂もないから、婆さんは多分まだ生きてゐるのであらう。そして雪が消えて、ほか〳〵した春の日がさし初める頃には、また婆さんのあの謎のやうな姿を路上に見ることが出來るのであらう。

×

靜かな心を以つて動ける世に安らけく處して行く人々の姿はたふとい。「靜動二つの間にしてすみかを得るものあり」といふ芭蕉のことばが私の心を去らない所以である。

人間の弱さと強さ

×

九月このかた震災地から避難して來た大勢の人達とずつと一緒に暮らしてゐたので、此の秋はただもう追ひ立てられるやうな慌しさのうちに過ぎてしまつた。それが四五日前來て居た人達を一度に皆送り出してからといふものは、急に家の中がひつそりとなつて、何だかこれまでに經驗したことのなかつたやうな秋の靜けさが感じられるのである。

今更のやうに自然の景物に心をとめて見ると、今年の秋もいつの間にかもう暮れかかつてゐるのであつた。見える限りの高い山々にはすつかりもう雪が來てゐる。庭の木の葉の色もこの二三日急に著しく黃味を增して來た。田の稻もすつかり刈り盡されて、刈株から伸び出たひこばえほど、私の感傷を誘ふものは少いのであつた。大地の上の草といふ草の殆んどすべてが枯

れかかつてゐる。それだのに此の稻の刈株から伸び出たひこばえばかりは、何といふみづ〳〵しい綠の色を見せてゐることであらう。すぐそこに寒さと暴風と霰と雪とを伴うた怖ろしい冬が攻め寄せて來てゐる。しかも、稻のひこばえだけはそんな事には少しも頓着なしに伸びられるだけ伸びようとしてゐるのだ。

暮れ行く秋の大地のところ〴〵には、稻のひこばえの他にもなほ多くの新綠を見せてゐる草の葉がある。しかし、それらの殆んどすべては春を待つて更に伸び上り、花を咲かせ、實を結ばうとしてゐる類のものである。稻の刈株からのひこばえはそれとは全く趣を異にしてゐる。少くとも冬の來ることの早い此地方では、稻のひこばえに花が咲いたり、穗が出たりすることは、到底望み難いことである。

しかも、どの田を見ても、どの稻の刈株を見ても、鮮かな綠色のひこばえがすく〳〵と伸び立つてゐる。すなほに勢よく伸び立つてゐる。人間に見るやうな運命に對する恐怖や不安などは、それには聊かも見られない。無論自然そのものに對する疑惑の陰などは露ほどもない。それは春の早苗のそれ以上に勢よささうに伸びてゐる。「何といふ力だ、そして何といふすなほさだ」時には思はずこんな感嘆の言葉を口走らずにはゐられぬほどに、それは氣持よく伸び立

つてゐる。

×

ところで、私は今こんなことを書いてゐるうちに、ふと先頃東京にゐる友人の一人から震災後の狀況を報じて來た手紙の中に左の如き一節のあつたことを憶ひ出したのである。

「ニコライ堂の側の一度は枯れたと思はれた銀杏の大樹が、此頃になつて綠玉の芽を梢に飾りはじめました。赤い燒原の中でその綠の色と力は、一種の痛々しさと强さとを感じさせます」

此の友人からの手紙の一節を讀んだ時にも、私は何といふことなしに「そこだ！」といふ氣がしたのであつた。人間同志おたがひに眺め合つてゐても、兎角切實に感じられないやうな事がかうして自然の景物から思ひがけなく、ぴたりと感じさせられる場合の少くないのも、感謝すべきことの一つであるやうにも思はれたのである。

×

自然は容赦なく奪ふ。しかし、それと同時に自然はより多くを與へる。このたびの震災に於ても、私はその眞實を疑はない。人々は容赦なく奪はれた。しかし、それと同時に人々は如何

に豊かに惠まれたことであらう。私はそのことを考へずにはゐられない。

多數の避難者達に私達は遇つた。何れも多くを失つた人達であつた。大半は所有してゐた「物」の全部を失つた人達であつた。しかも、私達はそれらの多くの人達の殆んど凡てについて、失つた「物」に對するあきらめ難い執着といふやうなものを見ることが出來なかつた。意外にも人々は快活であつた。意外にも人々は活淡としてゐた。「此人までが！」と怪しまれるほどの人々までがさうであつた。私達にはその事實が涙ぐましく感じられた。

私達は常に、時々刻々に失ひつつある、奪はれつつある。しかし、それと同時に私達は常に、時々刻々得つつある、與へられつつある。そして、如何なる場合に於ても、その與へられるものをひねくれずに受取り得る心を持つた人は幸である。玄米の飯をも充分に嚙みしめて味ふ心を持ち得た人々の經驗に對して私達は頭を下げずには居られない。

「人間といふ者は、環境に順應して、どうにでもなるものだといふことを今度といふ今度ほど痛切に感じたことはない」と人々はいふ。さうだ。一面に於て人間といふものはどんなにしてゐてもこれでいいとは感じ難いものだ。しかし、他面に於て人間といふものはどんなにでもして生きて行けるものだ。そこが人間の本當の强味だ。

私達は總じて多くの場合自らをあまりに弱く見積り過ぎてゐる。「あんなにしたらやつて行けないだらう」とか「そんなことには堪へ得ないだらう」とか「そんなことになつたらどうしよう」とか「そんなめに遇つたらどんなことになるだらう」とか云つたやうに、私達は兎角さまざまな豫想をしては自ら取越苦勞をし過ぎてゐる。しかし、いざとなると不思議にどんな境遇にも順應して行けるのが人間の常である。このたびの大震災の如きも、あれほどのことが想像出來ないとしても、少くともあれに近い災難を平時に豫想したとしたら、「なあに大丈夫だ！」と斷言し得る者は殆んどなかつたであらう。しかし、いざさうとなつて見ると、案外に、いやむしろ不思議に、人間といふものは強いものだ。おそらく多くの罹災者は自分といふものの意外の強さに驚いたことであらう。人々のさうした經驗の前に、私達は何となく頭が下るやうな氣がするのである。

×

あの地震のあつた日には私は私の住んでゐる町から二十餘里離れた或山奥の村へ講演に行つてゐた。地震は午前の講演が終つて午餐をしたためばかりのところへ襲つて來た。頑丈な石國の建物でさへも、殆んどぢつとしてゐるに堪へないほどの搖れ方で搖れた。動搖は引續き二

三回起つた。

「ひどい地震だつたね」

「こんな大きな地震は生れてから始めてだ」

「どこかひどくやられたところがあるのではなからうか」

こんな會話が人々の間々に取交された。しかし、その場合誰があんな事が起りつつあつたとは、想像し得たものがあつたらう。やがて午後の講演の時刻になつたので、地震の話もそれぎりになつてしまつた。その日の講演は午後四時に終り、やがて私はその夜の宿に充てられた其村第一の舊家といはれるとある家へと案内された。その家は森々たる老樹に圍まれた昔の豪族の山莊とも云ふべき幽靜な邸宅であつた。廣い庭の隅々にはもう大概秋の花が咲き揃ひ、さまざまな蟲の啼聲が四方八方から流れて來るやうに聞かれた。稀に見る古風な建物のガランとした廣間の眞中に、湯上りの疲れた體を横たへながら、私はやや暫く獨りしづかに蟲の啼聲に聞入つた。山奥は流石にもう秋の氣がしめやかに漂つてゐた。

「何といふ快い靜かさだらう」思はずかうひとりごたずにゐられなかつたほどに、私の心はしみじみと其靜かさを味つてゐたのであつた。

しかし、後から考へると、私はそのやうにして靜かな山奥の初秋の快さに浸つてゐた時は、震災地に於ける幾百萬となき人々が生きながら地獄の苦しみにさいなまれつつあつた時なのだ。しかも、交通の極めて不便な山奥の此村では、その翌日の午後になつてもまだそれについての何等の報道をも得てゐなかつた。久々で土を濕めらせてくれた快い雨の中を村人達はその日も昨日と同じ講習會場にと集つた。しかも、誰一人前日の地震のことなどを口にするものがなかつたばかりか、人々は寧ろ二百十日の厄日が彼等の久しく待ちこがれてゐた雨ですますことの出來たのを、互ひによろこび合つてゐた。

「ありがたいお厄だつたのう」

「結構なおしめりで、まことにおめでたいことでござんす」

こんな風に村人達は自然に對する感謝のおもひを語り合ふのであつた。六七月頃の雨續きと氣溫の低さとの工合では、今年の稻作はどうなることだらうといふ暗い不安がいたるところの農村に漲つてゐたのであつたが、八月一ぱい照りつづいた上に二百十日の厄日もかうして無事に濟んで見ると、人々の心は急に新たな歡びに波うつのであつた。

しかし、さうした歡びに心を躍らせながらも、人々はやはり自然に感謝することを忘れなかつた。

「よくしたものだ」

「ありがたいものだ」

こんな風に彼等は口々に自然の恩惠について語り合ふのであつた。

けれども此の土地の人々が斯うして自然の恩惠を語り合ひつつあつたと同時に、震災地に於ては幾百萬の人々によつてそのもたらせる慘憺たる災害の爲めに如何に自然が呪はれつつあつたことであらう。

後から私はこの事を思つて、今更の如く自然と人間との關係について何事かを考へずには居られなかつたのであつた。

×

このたびの大震火災について「天譴」といふ言葉がよく人々の口に上つた。さう考へるのはいいか惡いかといふやうな事まで論議されたりした。しかし、自然の所爲に對して人間がそれを恩惠と感じたり、又はそれを天譴といふやうに感じたりすることは、第三者から彼是論議すべきでないと思ふ。さう感じないで居られぬ人々には、さう感じさせて置いた方がよく、感じ

たくない人にはさう感じさせなくてもよいのではないか。むしろ吟味すべきはそれが眞實感であるか否かであると思ふ。いづれにしても自分にとつての眞實と感じられもしないことを、他人に強ひるのはよくないことなのである。況んや自分がその難にも遇はないでゐて、不幸な罹災者達に向つて大きな顔をして彼是云つたりすることは、怖ろしいことである。そんな事を私は思つた。

しかし、大天災の後では昔からきまつたやうにそれを天譴と感じた人が多かつたやうである。それで憶ひ出すのは文政十一年霜月の十二日の越後の大震災の後で流行したといふ瞽女唄である。瞽女といへば越後の特産であるやうに云はれてゐる盲目の女の唄うたひのことであ

る。越後には此のゴゼと呼ばれる盲の女の唄うたひは今でも多くある。彼等は二三人づつ組を成して村々町々を廻り歩いて、家々の門に立つてさま〳〵の唄をうたふのを職業としてゐる。今日では多くは世間の流行唄ぐらゐしか唄はないが、以前は彼等獨特の一種の物語歌風のものを主としてうたひ歩いたものである。そのゴゼ達が文政十一年の大地震の後で盛にうたつて歩いたといふ地震の唄も、やはり一種の天譴説の宣傳見たやうなものであつた。私はその瞽女唄の寫しの保存してあつたのを、先頃私の友人に見せて貰つた。次の如くである。

瞽女口説「地震の身上」

天地開けて不思議をいはば、近江湖水に駿河の富士は、たんだ一夜に出來たと聞けど、それは見もせぬ昔の事よ。玆に不思議は越後の地震、聞くも語るも身の毛がよだつ、頃は文政十一年の、冬の霜月中ばの二日、朝の夜あけとおぼしき時分、どんとゆり來る地震のさわぎ、たばこ一服落さぬうちに、上は長岡新潟かけて、中に三條今町見附、夫につづいて與板や燕、つぶす家數は幾百萬ぞ、さすやうつばり柱や桁と、背骨肩腰頭をうたれ、目鼻口より血を吐きながら……（コノ所文字不明）……手おひ死人は書き盡されず、數も限りもあらましばかり、親は子を捨て子は親を捨、可愛夫婦の中をもいまは、捨てて逃げ行く其行先は、焔もえ立ち大地がわれて、砂を吹き出し水もみ上けて、行くに行かれずただずむうちに、風は烈しく後を見れば、火の子吹き立て火焔をかむり、あつやせつなや苦しやこわや、中には憐れや手足をはさめ、泣きつ叫びつ助けてたべと、呼べど招けど逃げ行く人も、命大事に見向きもやらず、覺悟々々と呼ばはりながら、西よ東よ北南よと、思ひ〳〵に逃げ行く聲は、實にきやうくわん大きやうくわんの、責もこれにはよもまさるまじ、今は此の世が滅してしまひ、

彌勒出世の世となるやらん、又は奈落へ沈みもしよか、聞くもおろかや語るも涙、經に祈禱に香花などで、せつな念佛となへて見ても、何の印もあらおそろしや、晝夜ゆるぎは少しもやまず、凡そ七十餘日の間、瞻も心も消え入るばかり、親子兄弟顔見合せて、共にため息つき居るばかり、御大名には村上、新發田、與板、長岡、村松、桑名、會津、高崎迄其外に御料、御陣屋旗元衆も、思ひ〳〵に御手當あれど、時節柄とて空打ちくもり、雪はちら〳〵(落字)、親子親類寄り集りて、大工いらずの堀立て小屋で、つづれかむりて凌ぐとすれど、吹雪たち込み目もあてられず、殊に今年は大悪作で、米は高値諸色は高く……(中略)……是をつら〳〵考へ見るに、士農工商掟にそむき、神を片づける名聞後生、邪見けんどん心の儘に、利慾ばかりに世渡るものを、神の惠も佛の慈悲も、及び兼ねたる此有様よ、譯はどうじやとたづねて見るに、武士は武を捨て算盤枕、夫に習ふて地下役人も、下をしひたげおのれのおごり、昔小作の話を聞くに、葛を堀つたり磯菜をつんで、それで自分の命をつなぎ、收納作德立てしときくに、今の百姓はそれとは違ひ、少し不作の年柄にても、檢見願ふの拜借などと、上へ御苦勞田親へ對し、有るの無いのと言譯ばかり、其場其時濟みさへすれば、内の暮しは奢りの頂上……(中略)……それに順じて町家の普請、たかへひくしやくせり合ひ故

に、二重たるきに銅卷いて、屋根のしぶき柱の丈は、丁度昔の二本の長さ、御殿廻りか宮拜殿か、地下の家作と見られぬ仕かけ、前を通るも肩身がすくむ、されば心は獣に劣る、いかな困窮の年柄にても、收納家賃の用捨はあらず、少し下ると追ひ立てなどと、田をば上よと小前をせめる、慈悲も情もけし粒ほども、無いはことはり渡世の道理、深い考知らざる故ぞ……それはさて置き此の近年は、儒者の風俗つく〴〵見れば、黒の羽織に大小差して、詩だの文だの講釋などと、鼻の高いは天狗もはだし、錢のないのは乏食に劣る、晝夜大酒道樂づくし、己ばかりか弟子共までも、金をつかへば風流人よ、道を守るが俗物などと、宜か然らずの錢金まいて、書物讀み〳〵身上つぶす、わけて近頃寺衆の風義、淸僧淨師と勿體らしく、着たる衣は白粉くさく、光るお袈裟は刺身のにほひ、尼さん衣は子持のにほひ……(中略)……わけて憎いはお醫者でござる、隣村へは馬駕籠もたせ、知れた病氣も呑み込み顔で、少し容體わるいと聞けば、人にゆずりて己れははづし、……きかずさはらぬ藥の數を、たんとのませて衣服をかざり、禮の多少で病氣をつかひ、病家貧家は十日に一度、金になるのは毎日四五度……(中略)……さればつら〳〵考へ見にる、士農工商儒佛も神も、口說〇〇違ひはあらじ、天の戒め今よりさとり、忠と孝との二つの道は、己れ〳〵の職分守り、上に居る人下

憐れみて、下に居る人上敬へば、常にけんやく慈悲心深く、奢る心を慎むならば、かかる稀代の變事はあらず、かかる困窮はあるまいものぞ……(後略)……

文政十一年子十月

作者　桑津非文字大夫

板元　氣儘屋隙右衞門

此唄の作者は何人であるか知るよしもなく、又彼自らも地震の災厄に罹つたのであるかどうかもたしかめ得ないが、しかしかうした好ましくない文句をならべた歌を多くの盲の女達が村々町々の門毎に唄ひ歩いた有樣を想像すると、何だかあまりいい氣持がしない。當時の人達は――殊に震災土地の人達は――それをどんな氣持で聞いたであらうか。

このたびの震災に於てもそれを天譴と感じた人のあつたことそのことについて、私はかれこれ云ふ資格はない。しかし、果してそれを自分の身の上について眞實心の底から「これ實に我身にとりての天譴なり」と痛感した人がどれ程あつたらうか。他人の身にとつてでなく、眞に自分の身にとつてである。一般世間にとつてでなく眞に此のおのれにとつてである。要するに

何人にとつてよりも、此のおのれにとつてが大事である。

自分も同じく厄災に罹つた人が他人の上にあてはめてそれを云ふのはまだよい。しかし、自身は全く災厄に罹らずにゐながら多くの不幸な人々に對して天譴よばはりをすることは、弱い心の私達にはどうしても出來ないことである。

×

それにしてもこの度の震災は、何と云ふ美しい人間愛の泉をいたるところに湧き起らせたことだらう。鐵道各驛に於てその土地々々の人達によつてなされた熱情のこもつた避難者救護の狀況を見ただけでも、私達はこれまでにこんなことがあつたらうかといふ氣がした。震災のやや詳しい情報が一たび傳るや、いたるところの村々町々では期せずして驚くべきほどの同情が湧き起つたのであつた。此事は震災地にばかりゐた人達にはよくわからなかつたかも知れないが、地方へ避難した人達にはおそらく永久に忘れ難い印象を與へたことと思ふ。震災地からは遠く離れた邊鄙な私達の地方に於てすらも、各驛に集つたその町その村の人達は殆んど不眠不休の活動を幾日も〳〵續けたのであつた。一椀のあたゝかい味噌汁にも、どうにかして不幸な人々をよろこばせたいといふ多くの人の眞情が籠つてゐたのであつた。そればかりでなく、震

災地へ送る爲めの食料品、衣類その他の必要品、さうしたものが各町村の家々から徴發的に集められもしたのであつた。全くあのやうなことはこれまでには大戰爭の場合に於てすら見ることの出來ないことであつた。

かうした狀況の中にあつて、私達の實際にぶつかつて特別に深い感激を與へられた一つのエピソードを私はここに是非書き添へて置きたく思ふ。それは九月下旬の或日私達の町の臨事救護事務所——そこへ私も手傳ひに行つてゐた——に起つた事件である。その頃は此事務所では主として各戸から集めた米、味噌、衣類などの荷造りと發送とに力を集めてゐた。そこへ一日一人のあまり身なりのよくないお婆さんがやつて來た。そして受付の者にたづねた。

「地震で困つてをんなさる人さん方へ少し許りお金を寄附させていただきたいがでござんすが、どういふものでござりやんせう」

その頃はまだ義捐金募集には着手してゐなかつたので、受付の者は一寸返答に困つた。それと見てとつて他の委員の一人が横から言葉を挾んだ。

「金の寄附の方は、まだ手をつけてゐないんだが、折角のことですから、どうぞ、遠慮なくお出しください」

が此の「遠慮なく」といふ言葉の奥には、どうせ大した金額でもなからうから手數ではあるが……と云つたやうな多少好ましくない心持のあつたことは明かであつた。しかし、お婆さんの方ではそんなことに頓着なく、「それでは」と云つて懷中から大切そうに取出した一枚の紙幣を窓口へ差出した。ところがその紙幣を一目見るなりそこに居合せた係りの人達の顏面には一樣に驚きの色が現れた。

「これはお婆さん百圓札ぢやないか」と委員の一人が頓狂な聲でたづねた。

「ハイ百圓でござりやんす」

「これをお前さんが寄附してくんなさるといふんだね」

「ハイ」

こんな馬鹿げた會話が委員とお婆さんとの間に取交された後で、お婆さんは改めて事情を語つた。

「實は私の息子が去年二月三日に親不知で大勢の人達と一緒に雪崩で死にまして、その時世間のお方のお慈悲で私共はありがたいお救ひにあづかりました。その時そのお金の中から百圓だけ京參りの路金にでもするやうにといふことで私に貰つて置きました。それをそのまま

持つて上つたやうなわけでございます」

お婆さんの話は大體そんな意味であつた。此話を聞いて始めて人々には合點が行つたと同時に、その場に居合せたる一人として涙ぐまない者はなかつた。百人に近い屈強な青年達が社會奉仕の一念に驅られて怖ろしい吹雪と寒さとの中をも厭はず鐵道の除雪作業に出て、その歸途親不知で雪崩に遭つて無慘な死をとげた事は、まだ私達の記憶には新たなことである。お婆さんはその時慘死をとげた一人の青年の老母であつたのだ。

このたびの大震災に際して震災地では、無論數限りない美しい事件があつたに違ひない。しかし、遠く離れた此の土地にすらもかうした涙ぐましい事件がどれほど多く隱されてゐるか知れないのである。

誰やらが云つたやうに「さうした氣持もほんの一時だけで、ぢき忘れられて行つてしまふ」かも知れない。そして「ぢきに元のままになつてしまふ」のかも知れない。しかし、矢張り誰かが云つたやうに「さう云つたやうな心の狀態に時々人間が置かれるといふことは無意味なことではない」ことも爭はれない事實である。

私達はあの際――少くともあの際――自分の身を遠く危險から離れた場所に置きながら、我

こそ何もかもわかつてゐるといふやうな態度で徒らに天譴を豪語したえらい人達よりも、かうした田舍の無智なお婆さんのカケ値なしの美しい心持と行爲の前に、本當に頭が下るのである。

×

だが考へて見ると、私達のその日〳〵の生活の安全などと云ふことも、何だか雨の中を傘をさして歩いてゐる程度の安全に過ぎないやうな氣がする。私は時々雨の日に傘をさして歩きながら、「誰が考へ出したものかこんな細い竹を組み合せてそれに薄つぺらな紙を貼つてそれで雨を凌がうといふのはよくよく手數のかかつた無造作だ」といふやうなことを考へる。さう思つて見ると、誰もかもが自分の身のまはりの少しばかりの間に雨を落させないやうにして歩いてゐる、傘をさした格好が何となく可笑しいやうに眺められる。少しばかり強い風が一吹きぷつと吹いて來れば、もう其の紙ばりの防雨具は何の用もなさないのではないか。それでも人々はいかにも「これさへあれば、大丈夫だ」といつたやうな恰好で歩いてゐる。しかも、その道具をこしらふのにそれは〳〵一通りでない手數をさへもかけてゐる。何とかしてそれを格好よく美しく見せようとしてさま〴〵な加工さへも施されてゐる。

考へて見ると全く可笑しいほどあぶなつかしい藝當だ。だが、そんな事はすつかりわかり切

つてゐるにも拘らず、傘はすたらない。なるほどそれは不完全にはちがひない。しかし、「何が一體完全だ」から考へて見ると、萬全でないものは傘ばかりではないことになる。だがその萬全でないものを萬全だと信ずるところに危險が伴ふだけだといふことになる。「なあに、いざとなつたら肌まで濡れたつてかまふものか」さう考へてゐる者には、萬全でない傘もまづ〳〵役に立つ道具である。萬全でないから、不完全だからといつて、傘をささないで雨の中をわざ〳〵濡れて歩いたら、それこそ馬鹿の骨頂である。

このあひだも或友人とその話をしたのであるが、その時その友人は云つた。

「さう云へば誰やら古人の句に『舟までは海士も傘さす時雨かな』といふやうなのがあるじやないか」

なるほどそれは面白いと私も思つた。そしてこんな事をも二人で話しあつた。

「震災地の復興だつて、まあそんなものぢやなからうか。どんなに工夫を凝らしたからと云つて、これでもう大丈夫だ、どんな地震が來ようが、どんな火事が出ようが、もう大丈夫だ、そんな完全な復興が出來やうと思へないからね、しかし又それだからといつて、どうでもいいやではわざと傘なしに雨に濡れて歩くやうなものだしね」

「そこだよ、要するにいざとなつたら濡れたつてかまふものかといふ。どん底の覺悟が何より安全の土臺といふもんだ。さう云へば、良寛和尚があの文政十一年の大地震に遭つた後で與板の山田杜皐といふ人に送つた手紙の中にもそんな事が書いてあつたよ。『しかし、災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候死ぬ時節には死ぬがよく候これはこれ災難をのがるる妙法にて候』つてね。と云つたところで吾々のやうな凡夫は其覺悟だけでは生きて行けない。そこが又人生の妙味のあるところなんだらうよ」

×

震災の印象について書かれた吉田絃二郎君の文章の中に「何十年來見たことのない美しい空が燒け滅びた都會の殘骸の上に横つてゐる。氣の毒な人々の死骸を葬つてしまつたら、私たちはしばらくこの美しい空を見るがいい」といふ一節のあつたのに、私は心を撲たれた。

それにつけて憶ひ出すのは、先年私の七歳になつた男の子が物心ついてから最初の東京見物に行つて來ての話の中で、

「お父さん東京には星がないね」

といつた警句である。その時私は子どものその警句がひどく氣に入つたので、重ねてたづねて

見た。

「どうして東京に星がないんだらう」

それに對して子供は即座に答へた。

「それはね、お星さまは東京みたいなにぎやかなところは嫌ひだからだよ。お星様はやつぱしこつちのやうなさびしいところが好きなんだ」

私達は重ねてその警句に驚かされた。そして子供といふものは、大人達の氣のつかないうちにも、何かと自然の現象に注意してゐるものだなと、つく〳〵感心したりしたことであつた。吉田君ではないが、このたびの震災後東京に住みなれた人達も、さすがに空の美しさや、星の美しさに始めて目をとめたことであらう。

×

それから又地方から震災後の東京へ行つて來た或人の書いた文章の中に、夕方とあるバラックを覗いて見ると、そこにはもうほの暗い燈燭がともされてゐて、その薄暗い明りの下に一家五人が顔を集めて物語つてゐた。見ると娘の膝の上に、愛くるしい小猫が丸くなつて咽喉を鳴らしてゐた——といふやうな事の書いてあつたのを讀んだ時にも、私は或一種の感動を與へら

れた。

そしてその事が又私にずつと以前今私達の住んでゐる町が大火に罹つた折の一つの記憶を喚び起させた。その時の大火で私達の町の半ばは焼けてしまつたのであつた。人々は殆んど皆家財と共に海岸の砂濱に避難してゐた。その人間やら家財やらゴタ〳〵混雜してゐた砂濱で、曉の光がほの〳〵と東の空からさし初めるや否や、どこからともなく晴れやかなカナリヤの鳴聲が聞え出した。それは誰かが家財と一緒に持ち出して來た小さな籠の中で鳴いたのであつた。その瞬間疲れ切つて倒れて居た大勢の人達が、一度にむつと起き上つて、

「オヤどこかでカナリヤが鳴いてゐる！」

から一せいに叫んだのであつた。

私は今その記憶を喚び起させられたのである。東京のバラックに猫のゐたことに心を惹かれた其人はこんなことをも書き添へてゐた。

「あの焦熱地獄の中を——荷物は愚か我身一つを持あぐね、親子さへ見捨て合つて、命から〳〵逃げのびた中を……猫一疋の生命を憐んで、連れて逃げた其の慈心を思ふと、急に尊敬の念が胸をついて、一種の云ひ知れぬ涙が湧いた。此の家族の上には、やがて惠まれた幸福

が必ず來ると思つた」

なるほどさうした慈悲心の現れとしての涙ぐましさも其事柄から感ずることが出來るけれども、それ以外にもさま〳〵の復雜したことが考へさせられたのであつた。

×

おひ〳〵寒さが押しよせて來る。震災地の人々の不自由な生活が、しみ〴〵おもひやられる。だが、人間は案外強いものでもある。バラック生活も日數がたてば、そこには又案外味のある住心地も出て來ることであらう。今住んでゐる私達の町の如きも、幾度となく町の大半を燒き盡されたほどの大火に罹つた。最近では十三年前のが最もひどかつた。その時から今日までの永い間、いまだに假小屋住居をつづけて來てゐる者も少くない。さう云ふと私自身もまだ家の半ばはその時の假小屋のまま住んでゐる。農村では假小屋でなくても、まだ疊を敷かないで暮してゐる人達が非常に多い。

一日も早く震災地の復興されることは、無論切念に堪へないことである。しかし、何事もさう思ふやうに早くは運ばないであらう。此際私達の第一に祈りたいことは、災厄にかかつた多くの不幸な人々の上に、人間といふものはいかなる境遇の下にも順應して行けるだけの強さが

あるといふ眞理がいやが上にも實證されるやうにといふことである。

それは兎に角、この度の大災厄を經て生命の全きを得た多くの人々は、おそらく自らの强さに驚いたことであつたらう。「よくもあんな中を逃げられたものだ」とか「よくもこんな苦しみに堪へられたものだ」とかいふ言葉を、私達は多くの避難者の口から聞いた。一方から考へると、人間ほど脆いものはない。しかし他方から考へると人間ほど强いものはないのである。

×

つひ此間東京にゐる或友人から來た葉書に、「武藏の荒原で原始的住宅を造るのに忙しい人々」と題するスケッチがかいてあつた。そして其畫面の中に赤とんぼを追ひ廻してゐる一人の少年の姿が點出されてゐた。それが私にはひどく面白く感じられた。又荻原井泉水氏の「大震雜記」と題した文章の中には、或難澁してゐる家族に交つて隣の子が地震の眞似事をして喜んでゐたといふ事が書かれてゐた。それについて荻原氏は「子供は强い、どんな不幸でも災厄でも、子供ばかりは打ちのめすことが出來ない——私はそんな事も考へさせられた」と書いてゐた。

かうしたことは私達の町が先年海嘯と云つてもいい程の大激浪に襲はれて今にも全滅しさう

になつた際にも、私達の經驗したことであつた。その時の暴風浪は三晝夜つづいた。山の方からは洪水が押し寄せて來、海は今にも町全體を呑み込みさうに見えた。霰を混へた瀧のやうな雨、家をゆるがす暴風……さうしたすさまじさの中に、私達は電燈もつかない、ランプもともすことの出來ない、眞暗な怖ろしい二夜をあかした。ところがさうした中にあつても、子供だけは第二日目からは何の恐怖も感じないげに家の中で遊んでゐた。夜もすや〳〵とよく眠つた。

私達はそんな忘れてゐた記憶までも此の機會に鮮かに喚び起されたのであつた。

×

今日もすさまじい暴風雨だ。小さな私の家などは船にのつてゐるやうに、ぐら〳〵搖れつづけてゐる。もう今日あたりは山奥の村では雪が降つてゐることであらう。毎年十一月の中旬から翌年五月までの永い間雪の中に暮らす村が此の地方の山奥には多くあるのだ。雪の降らない地方の人達から考へたなら、どうしてそんな所に安んじて住んでゐるのだらうと怪しまれるかも知れない。しかし、そこには又そこだけの特別の味のあるものである。人々はその味ひを求めもし、創造もしてそれ相應の生活を營んでゐるのだ。

人間は弱いやうで、案外強いものだ。（大正十二年）

自然の前に立つ我

最近私はある新聞紙上に掲げられた一人の若い文明批評家の隨筆の中で、

「靜かな山川の大きな石に腰をかけたりしてゐると、何だか餘計なものがそこにあるやうに、自分を感ずる」

といふ一節にぶつかつて、ひどく心をうたれた。そして

「何といふ痛ましくさびしい心であらう！」

かうした歎息を、私はその人の爲めに漏らさずにはゐられなかつた。といふのは、私自身又のやうなことを常に深く感じ想つてゐるからである。

「ただ獨り自然のふところに抱かれてゐる時感ずる靜かな歡びこそ、最高の生の歡びではあるまいか。自分は多くの場合獨りさびしさに堪へられなくなつて人間の世界へ乘り出したりしたり、もぐり込んだりして生活してゐる。しかしさうした生活のうちに、自分はいまだかつて衷心から生の歡びに充たされた自分のたましひの存在をたしかめ得た事はなかつた。これに反してただ獨り自然のふところに抱かれ、一切を忘れてその美に味ひ入つてゐる時、私は眞に何にも煩はされない幸福を感ずる。その時私といふ一個の存在の意義や價値についての思惑などは、露ほども私の心に起らない。その時私はただ『あるがまま』の存在である。しかも同時にそのままで充ち足りた存在である。私の生はその時のみ擴充を感ずる。その時のみあらゆるものが私にとつて美しい。」

そのやうに私自身にとつての最高の、そして唯一の「救はれ」の時間である。さうした場合においてなほかつ自分といふものを一個の餘計もののやうに感じなければならぬといふその人のさびしさは、何といふ痛ましいさびしさであらう。私にはさうしか思へなかつたのである。またさうではなからうか。

×

世に立ち交つてゐる間、如何なる場合においても私は「我」を忘れ切ることが出來ない。そこに私の最も大きな惱みがある。ただ獨りでゐる時でも、私は自分を忘れ切ることが出來ない。さうした私ではあるが、ただ獨り自然の美しさに接する時のみ、私は一切を忘れてその中へ吸ひ込まれてしまふ。あらゆる思惑から離れて、私は純眞にその美に浸ることが出來る。これは今の私にとつては最高の、そしてただ一つの「救ひ」である。その時のみ私は眞に幼な兒のごとくなる。そして生の歡びの充實を感ずる。

だが、私がかうした歡びを眞に感ずることが出來るやうになつたのも、この數年このかたのことである。以前においては、私にはそれは出來なかつた。その以前の私は自然に對してすら自らの思惑を離れることの出來ない私であつた。自然の前における自己の大きさを計つて見たり、自然と自分との關係を考へて見たり、人間に對する自然の意思を付度して見たりしないでは居られぬ私であつた。

そして他人に對し、世間に對し、とかくひどく思ひあがり勝ちであつたにも拘らず、自然そのものの前に立つと、それは〳〵あはれむべくいくぢのない、弱く小さな存在であつた。他人に對し、世間に對しては、かなり大きく自分を見積つて、何もかも解つた人間であるかの如く

振舞つたり、しやべつたりしてゐながら、獨り靜かな自然に相對する時には、前に擧げたある苦い文明批評家ではないが、何といふことなしに自分を「餘計者」でもあるかの如く認めてしよげ込んでしまふのであつた。

それをおもふと、今の私は、少くともその一事において「惠まれた人間だ」といつていいやうな氣がする。

×

私はまた最近一人の若い重罪犯人の獄中記の中で、左の如き一節にひどく感動させられた。

「僕はここに來てから、自然の美しさと清さとを今更ながら痛切に感じた。僕は毎日、空や、雲や、太陽や、木や草をどんなになつかしい氣持で眺めるか知れない。自分は時々、他人が厭はしくなる事や、この世の中がいやになる事がある。しかし、自然の美しさに接すると、「生きてゐるのは幸福だ」と思ふ。その時、生の歡喜が、僕の胸に強く湧く。「生きてゐたい。人間とは親しめないでも、この自然と親しみ愛し合つてゐれば充分生の喜びはある」と思ふ。生の執着が急に強くなる。僕はここに來て始めて、自然に對する愛を背景とした生活の美し

さを知つた。それがなつかしくてならない。」

この若い人はそれから數ヶ月後に死刑に處せられたのであつたが、それにしてもこの貴い歡びを死ぬ前に知り得たことは、この人にとつては最高の幸福であつたと私は思ふ。おそらくこれがこの人にとつての「最高の救はれ」であつたであらう。もしもこの人にしてこの「救はれ」すらも得られなかつたとしたら、この人の最後はどんな悲慘なものであつたかわからない。

それにつけておもひ出すのはオスカア・ワイルドの獄中記『ド・プロフアンデイス』の最後の一節である。

「吾々が形成してゐる社會は、私が獄を出てから、何の地位をも職業をも私に與へてくれないかも知れない。けれども、正しいものにも正しくないものにもおなじやうに、甘い、心地よい雨を降らせるこの自然は、私に、かくれるためには岩のほら穴を與へ、いささかも心を亂さるる事なく思ふさま、さまよひ泣くためには、靜かな、淋しい、祕密の谷間を與へ、また私が暗夜にもつまづくことなしに外國までもさまよひ行くためには、夜の空に星を輝かし、

またたれからも私を迫迫されぬためには、風を吹き送つて私の足跡を消し、かくして私をかばひつつ、やがて大海原の中に私を淨化し、もしくは荒原の中に私の生涯を葬り去つてくれるであらう。」

あの一代のしやれ者であり、享樂主義者であり、そして思ひあがつたエゴイストであつたワイルドにさへも、自然は遂にかくまでも謙虛な心の安らかさを與へた。

もし自然に對して一切の思惑を離れてのかうした生の歡びをすらも感じることが出來なかつたとしたら、彼の獄中生活は無論のこと、出獄後の彼の生活はあれ以上どんなに暗黑な、悲慘なものであつたらう。若し自然に向つてこの謙虛な信賴すらも持ち得なかつたとしたら、彼のやうなエゴイストはおそらくつひに狂死せざるを得なかつたであらう。

×

私の町に盆栽に深い趣味を持つてゐる一人の盲人がある。盲人が植木を愛するといふことは變なことであるが、實際彼は盆栽を何よりの趣味としてゐる。そしてかなり多くの鉢植の木や草を育てて樂しんでゐる。それを不審に思つて彼の樂しみの那邊に存するかをたづねる人があ

ると、彼は常にこんな風に答へる。

「私が盲になつたのは十歳でしたから、木や草の美しさは充分知つてゐます。その記憶と、それからの手の觸り心地とで、私にはそれぞれの植木の持つてゐる姿や色がはつきりと心に見えます。またたづねて來てくださる人達のいろ〳〵と賞めてくださる言葉――それが一層あざやかにその美しさを私に見させてくれます。そればかりではなく、自分の手で輕く木の全體に觸つてゐますだけでも、不思議に私の心の中にその姿やその色や何かが自然に描き出されて來て、それがまたたまらなく樂しいのです。この木は今勢がよいか、また弱つてゐるか、それも一寸さはつて見ればすぐ感じられます。勢のいい木は葉の先にちつとさはつて見ただけでも、不思議にはれ〴〵した氣持を與へてくれます。この木の生氣を手先に感じさせてもらふだけでも、私には充分植木を育てて行く甲斐があります。お察しの通り盲人といふものは、何かにつけて疑ひやひがみの多いものですが、ただかうして植木の美しさを心で眺めたり、手で感じたりしてゐる間だけは、私は全く何もかも忘れてゐます。この樂しみがなかつたら私などのやうな根性のひねくれた奴は、どんな悪い量見を起すか知れたものではありません。私のやうな不具者に育てられながらも、すなほに成長し、自然に姿をととのへ、

紅葉すべき時に紅葉し、落葉すべき時には落葉し、芽を出す時には芽を出し、花を咲かすべき時には花を咲かせてくれる――それがまたおのづと私の心に何ともいひやうのない歡びを與へてくれるのです」

この盲人の話も、私を深く感動させずに措かなかつた。目の見えない人の中にも、自然に對してかくまで強い愛を感じてゐた人があつたのか――そのことを思ふだけでも、私は實に、いい氣持ちになるのである。

私はかつてツルゲネーフの文章の中で、大自然の前に立つた時は自己の弱小感に堪へられないで、こそ〳〵とまたもとの人間の仲間へ逃げ歸る、といふやうな心持を敍してあるのを讀んで、いかにもと感心したことがあつた。

しかし、今から考へて見ると、あの頃の私は自然の前に立つてすらも自分といふものについての思わくから離れ得ないみじめなエゴイストであつたのだ。他人に對し人の世に對して思ひ揚つた氣持でゐればゐるほど、私は自然の前における自己の弱小を、自己の存在の無意義をより多く感じた。人の世に對してえらがりであればあるほど、私は自然の前にはます〳〵意氣地のないやくざ者であつた。

しかし、今はその全く反對である。人の世に處して年一年とます〳〵深く自己のやくざを感ずる代りに、年一年と自然の前に立つて歡びを感じつつあるのが、今の私である。しかし、その爲めに私は人間の世から離れて、自然の中へ沒し去らうなどといふ徹底した念願などは持つてはゐない。むしろそんな考へを持つことがすでに自然に對する「はからひ」だとすら思つてゐる。

人の世を捨てて山野に姿を沒するといふやうなことは、考へやうによつては、自然からの惠みをむさぼらうとする人間の我儘である。自然の惠みは「はからひ」や「思はく」で求めない者にこそ眞に與へられるのではないか。花を探し廻つてゐる時、却つて私たちは花に逢はない。

この安心

×

俳人一茶の文章に乞食の出産祝の有様を叙したのがある。私の好きな文章の一つである。

「下總の國布川の郷、來見寺の傍ら、田の中の塚に、孤四五枚引張りて、酒絞る叟あり、味噌する童あり、怪しと木隙れて伺ひ待るに、初孫まうけしなど笑ふ聲して、いと優に、志もやさしげなる青女房の、麻といふもの髢にまき添へ、花撫子の雨を帶びたるさまに少し打萎れて、惱める容のあからさまに見ゆ、斯るいぶせき藪原に在るべき體とは覺えず。まさしく百鬼の不思議をなすか、狐狸の人の目暗ますかと、或人に問えば、是れは此邊りの門に立つて、一文半錢の憐みを受けて、世を過ごす乞食となん。誠に其樂しむ所、王公といふとも、

此外やはあるべき。財蓄へねば盜人の憂ひなく、家作らねば火災の恐れなし。幸にして心を養ふことは、なか〳〵祿ある人にも過ぎたりと云ふべし。綾羅錦繡の美しきも彼等の目には、雀蟻虻の前を過ぎるとや見ん。いで此内の趣は、離婁が目にも、いかで見分るべき。今宵は嫡子初七夜の祝ひに、其黨を集めて、子孫長久を祈るなるべし。

赤子からうけ習はすや夜の露

野人一茶の面目實に躍如たるものがある。彼みづからも或は「乞食一茶」と戯稱し、或は「信濃國乞食首領」と名乘つただけに、彼が此のやうな情景に對した時の愉快さが察しられる。前半の叙寫の簡潔にして生氣ある、後半の氣焰まがひの讃辭のいかにも「すねもの」一茶らしき、いづれの點から見るも一茶でなければ書けさうに思はれない好文章である。一茶は生涯貧に苦しみつづけた。而も彼はいたづらに富貴を希はなかつた。彼はむしろこの自由、この氣樂、この安住を羨んだ。そこに一茶の反抗があつたと同時に、そこに彼の安心もあつた。貧苦に惱んだ一茶と、貧苦の底に特殊の安全境を求め得た一茶と――この兩面がいみじくも表現されてゐるところに一茶の藝術の獨特の味ひがある。

×

蓮月尼の研究家として最近有名になつた須磨の伴時彦(葛園)翁が去る三月二十四日に永眠された。私は不幸にして翁には生前一度も面接の機會を得なかつたから、其の人柄については何も知るところがないが、最近當主の方から報じられた翁最後の有様によのて、翁が如何に大悟の境界にあつた人であつたかの一端を窺ふことが出來た。左に嗣子苔園氏の私信の大意を掲げて見よう。

「父は全く何の病苦もなく、死の一時間前迄謠を謳つてゐた程であつた。而も三日以前に死の日時を家人に告げ、なほ死後に於て訃報など断じて發してはならぬと命じた。父は更に私達にこんなことを云ひきかせた。『自分が世に生きてゐたことその事が既に世の中の人々の御世話であり御厄介であつたのだ。だからこれ以上罪を重ねることは誠に相濟まぬことである。會葬の如きも兒等三人に限る。自分の兄弟達へも後に報ぜよ、神官や僧侶は勿論必要なし』そんな風に云つて最後に『さらば、子等よ』の數語を殘し、更に、

須磨山に隱れて年をふる頭巾

の一句をかすかに口吟しつつ靜に息が斷えたのであつた。」

何といふ淡如たる心境であらう。さすがに蓮月尼に私淑してゐた人だけあると、私はつくづく感嘆した。蓮月尼その人も矢張り「自分が病死にとりつかれても誰にも知らせてくれるな、しかし死んだらば富岡鐵齋翁にだけは知らせてくれ」といつて居たといふことが、伴翁の『蓮月尼の人と歌』の中に書いてあつた。翁の最期も正にその通りであつたわけである。

かうした人の話を聞くと、私たちは自ら省みてあまりに隔りの大きいのになさけなくなる。

×

それにつけておもひ出すのは、つひ先頃私の親しくしてゐた或老人が、死ぬ十日程前に、

「いや、此の分ならおひ〳〵元氣がつくだらう。それに日に〳〵暖かな時候にもなるのだから、さう心配しなくてもよからう」

といふやうな慰めの言葉を醫師が云ひきかせたのに對して、

「嘘つけ！」

と投げ出すやうに獨語して、舌をペロリと出して見せたといふ話である。

此の老人は生涯商人で通した人で、別にこれと云ふ精神修養を積んだといふわけではなかつたが、而もさうした境界にまで達してゐた。

さうかと思ふと、ツルゲーネフの散文詩の中にあつた話だとも思ふが、或る信仰の高かつた人が、臨終にどんな尊い言葉を遺すだらうかとの人々の期待を裏切つて「柿が食ひたいなあ」と叫んで息絶えたといふ話もある。

かたみとて何かのこさん春は花夏ほととぎす
秋はもみぢ葉

といふ辭世を遺して、百年後の今日私達に得難い尊い糧を與へてくれてゐる良寛和尚の最期が尊いと同時に「自分には今更の辭世はない、生涯詠みすてた自分の句々悉く自分の辭世である」と云つて、一句の辭世をも遺さなかつた芭蕉の臨終も尊い。

×

一茶が或人の賀壽の筵へ寄せた賀詞の最後にこんなことが書いてある。

「垣の朝顔の曲らふと、すぢらふと、あんな物と見すまして、彼が氣儘にはびこれるを樂しめる上人は、青蔓のひよろ〳〵長生きいたされしとかや」

そして最後にかう結んである。

「……鶴の、のろ〳〵、龜の、はた〳〵、松の、によき〳〵、竹のすら〳〵、只あれはあんなものと見すまして、活きたい程生き給へ、さらば〳〵云々」

「活きたいほど生きたまへ」などは一茶でなければ云へない言葉である。一茶にとりては自然であることが、最も願はしい生き方であつた。

×

博多の仙厓和尚が或日庭で草むしりをして居た。そこへ來合せた一人の老婆が和尚に向つて言葉をかけた。

「和尚さん何をして居られます」

和尚は答へた。

「俺は今糞をたれてゐる」

老婆は云つた。

「あなたは草を拔つておいでではありませんか」
すると和尙は云つた。
「わかつてゐるなら聞くない」
私は最近その話を三松莊一氏の『仙厓和尙の生涯と藝術』の中で讀んで、思はず膝を打たされたのであつたが、その後私の友人で、星見天海禪師の遺弟の一人から、次のやうな話を聞いて、一層面白く思つた。
天海禪師が越後に隱棲してゐた寺の近くに、一人の痴者があつた。名を「五」と呼ばれてゐた。或日禪師は寺に遊びに來てぶら〳〵してゐる「五」を認めて、
「おい、五や、手前そんなでつかい體をしてゐて、なぜ遊んでばつかし居るんだ。親爺の松葉掻きの手傳ひでもせんか」
と叱りつけるやうに云つた。
すると「五」は卽座に答へた。
「禪師さまつてそんなことを云ふもんじやありませんぜ」
これには流石の天海禪師も頭をかかへて逃げたといふことである。これは仙厓和尙の話と反

對に禪師の方が問答に敗けたのである。
私達のやうにわかり切つたことをもつともらしく云つて居る者は、やはりその馬鹿から叱られる仲間であらう。

16060

同胞援護
Seal
書本購券
百華苑

昭和二十三年十月一日印刷
昭和二十三年十月五日發行

凡人尋土鈔　定價金百參拾圓

著作者　相馬御風

發行者　清水秀雄
京都市下京區堀川通花屋町

印刷者　田中文功社
京都市下京區上鳥羽小學校前

配給所　日本出版配給株式會社
東京都千代田區神田淡路町

發行所　百華苑
京都市下京區堀川通花屋町
會員番號A二〇八〇五七番
電話下京五七六〇番
振替京都二五七六六番

岡本かの子　佛教人生讀本　價六拾圓　送拾圓

亀井勝一郎　信仰について　價九拾圓　送拾圓

岡本かの子　光をたゞねて　價六拾圓　送拾圓

足利淨圓　續一樹の蔭　價百拾圓　送拾圓

川上清吉　光を聞く　價百圓　送拾圓

亀井勝二郎　親鸞　價六拾圓　送拾圓

花岡大學童話集　小さな村のランプ　價四拾圓　送拾圓

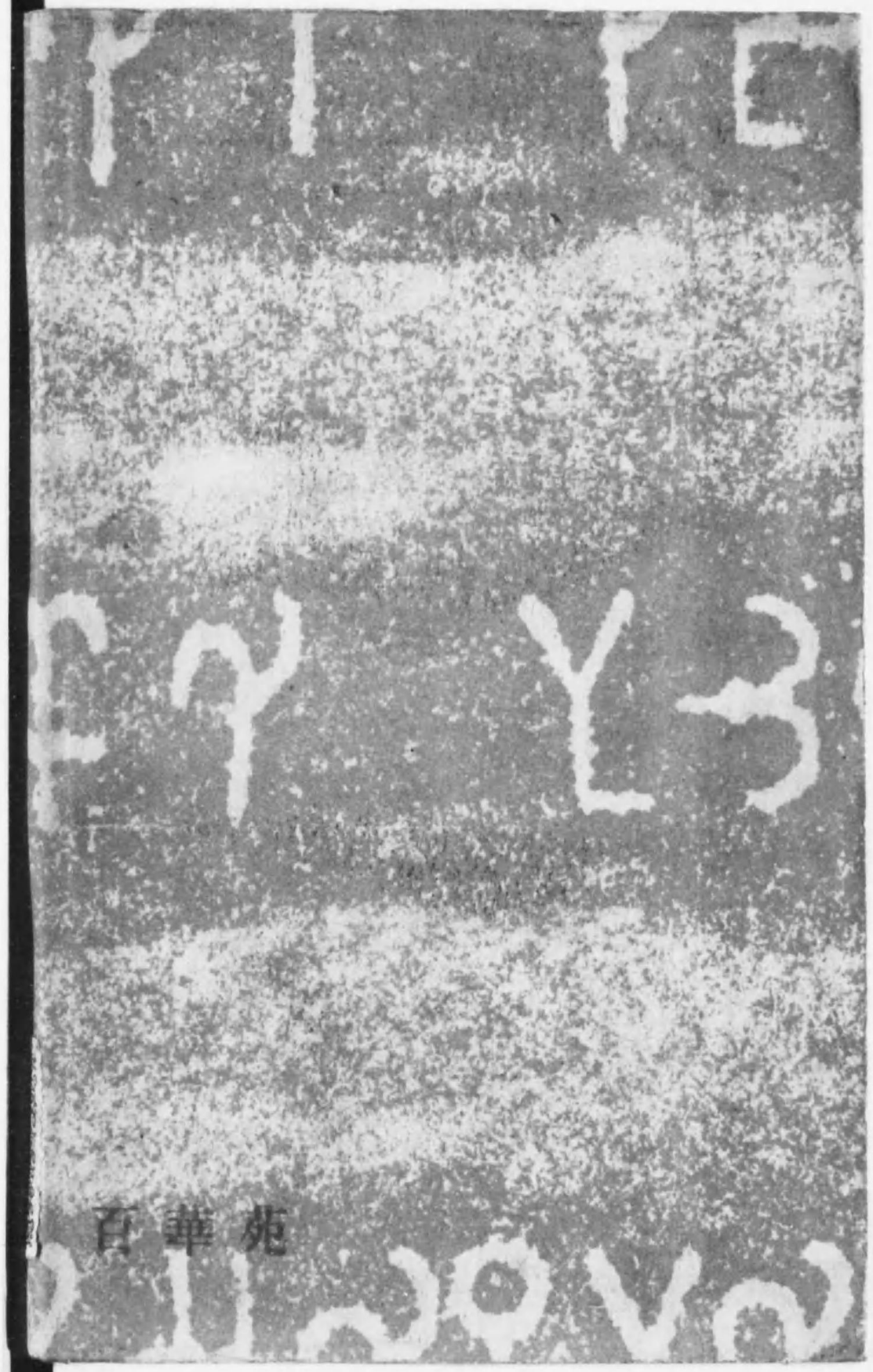
宮澤賢治童話集　四又の百合　價九拾圓　送拾圓

百華苑

昭和廿年參月一日貳時

内閣

〇|〇

ノ ナ ヘ

終